

プロローグ

『傷だらけの天使』。それは1974（昭和49）年10月から1975年3月にかけて全26本が放送された伝説的「テレビ映画」である。

「大宮のローリング・ストーンズ」とも呼ばれたGSバンド、ザ・テンプターズのヴォーカリストとして活躍したのちに俳優に転向。これまた伝説的な刑事ドラマ『太陽にほえろ！』（72〜86年）の初代新人刑事役で圧倒的な人気を得た萩原健一（はぎわら）シヨーケンの、さらなる表現欲求を満たすために企画された野心作。

レギュラー出演者は当時、新進気鋭の水谷豊、特異な存在感で圧倒する岸田森（しん）、岸田今日子ら。そして多彩かつ豪華なゲスト陣が集まった。

萩原の要望で深作欣二（かみんじ）、恩地日出夫（おんち）、神代辰巳（かみしろたつみ）、工藤栄一といった劇場映画で高い評価を集めていた映画監督が招聘（しょうへい）され、斬新な演出で「テレビドラマ」の枠を打ち破った。

さらに萩原のコーディネイトは盟友・井上堯之^{たかゆき}、大野克夫^{かつお}らによるニューロツク的な音楽、菊池武夫による最先端のファッションにも及び、その圧倒的なカリスマを往時の若者たちに叩きつけた。

メインライター・市川森一^{しんいち}はじめ気鋭の脚本家たちはセンシブルな物語を紡いだ。

放送当時はさほどの視聴率もなく、性的描写の多さから不良番組扱いもされた本作だが、熱烈なマニアを生み、今なお熱く語り継がれている。本作から受けた影響を公言するパフォーマー、クリエイターも多く、後年にはオマージュをささげた映画、その設定を引き継いだ漫画、小説なども発表されている。

そして、放送から50年近くの時を経た今も、D-NEXT、アマゾンプライムなどの動画配信サイトやDVDソフト、映画・ドラマ専門チャンネルで繰り返し返される再放送を通じて、そのぎらついた輝き、猥雑^{わいざつ}な空気、そして「かっこ悪いという名のかっこよさ」を見せてくれている――。

今回、そんな『傷だらけの天使』の書籍を執筆することになったひとつのきっかけに、

私と共著者の佐藤洋笑さんの、共通の知人であるラジオディレクターT氏からの、熱烈な後押しがあった。T氏は1965（昭和40）年生まれの現在50代後半。本放送、再放送で『傷天』の魅力にどっぷりはまり続けた世代だ。

「自分と、その同世代の人間たちが熱烈に愛する『傷だらけの天使』の製作当時の背景を、空気を、おふたりの文章を通して感じ取りたい」というのが、T氏の願いだっただ。

私と佐藤さんは『傷天』に関しては本放送も再放送もリアルタイムでは体験したことがなく、遅れて来た世代ではあるが、もちろん伝説の番組だということは知っていたし、興味もあった。

また、当時は助監督だった岩崎純氏や、脚本家の柏原寛司かしわばらひろし氏など、過去の著作で取材して知遇を得た方々が『傷天』に参加していることも、取材をしてみたいと思った動機のひとつだ。

本書は、昭和の若者たちに鮮烈なインパクトを与えた名作青春「テレビ映画」の制作関係者の証言、そしてその影響を多大に受けたクリエイターたちの回想をもって、この稀有けう有

な番組の成り立ちを解き明かし、その価値を改めて世に問うものである。

自由を求めて社会に挑戦していったオサム（萩原健一）とアキラ（水谷豊）の姿は、長引く経済不況や過度の同調圧力で息苦しいこの国に生きる、老若男女全ての人々の共感を得るであろう……これは『傷天』後追いつ世代である私の嘘偽らざる感想である。

主演・萩原健一はじめ、物故したスタッフ、キャストも多くなつた。今こそ、いや、今やらねば、この永遠に語り継がれるだろう『傷だらけの天使』に携わつた人々の証言を集めることは不可能だ。私と佐藤さんは鮮烈な現場の記憶に迫るべく取材を重ねた。その結果を是非、ご一読いただきたい。

本書では、撮影、編集など映画（テレビ映画）の現場における実作業のことを「制作」、それに対し、資金集めなども含めた作品全体のプロデュースのことを「製作」と分けて表記する。例えば、映画会社が映画を作る場合は「製作」。テレビ映画ではテレビ局が「製作」、その下請け会社は「制作」となる。

2024年1月

山本俊輔